

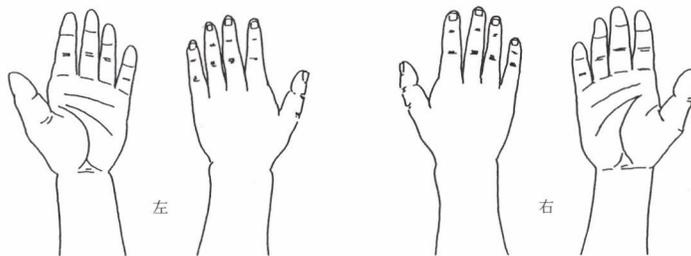
書式XIII 手関節障害の機能評価表

カルテNo. (ID)	氏名	男・女	年齢	利き手	右・左	患側	右・左・両側
			歳				
診断名							
検査日	年 月 日	発症日	年 月 日	初診日	年 月 日		
検者名	(医師・OT・PT)	受傷日	年 月 日	手術日	年 月 日		
手術名							

I. 疼痛

A. 程度 (P66 I 関節機能評価 1. 疼痛参照), VAS _____ cm

B. 部位 (図に記入)



II. 変形, 腫脹, 瘢痕, 色調 (図に記入)

III. 計測

A. 可動域

	右	左
背屈	○	○
掌屈	○	○
橈屈	○	○
尺屈	○	○
回外	○	○
回内	○	○

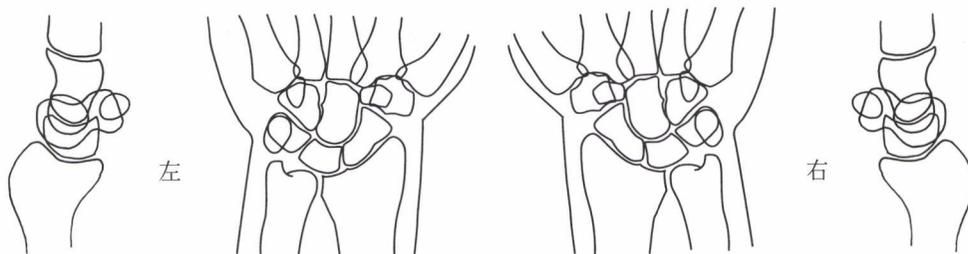
B. 握力

右	左
kg	kg

IV. 日常動作 (できる-○, なんとかできる-△, できない-X)

- 1) 洗顔 () 2) 食事 () 3) シャツのボタンかけ ()
 4) 用便の始末 () 5) 書字 ()

V. X線所見



VI. 復職状況

VII. 満足度

手関節障害の機能評価基準

I. 手関節機能評価 (Cooney の評価法の改変)

1. 疼痛 (20)

なし	—	20
軽度	—	15 頻度は少ないがときどき痛む
中等度	—	10 頻回に痛む
高度	—	5 常に痛む
激痛	—	0 常に痛み、薬を要する 使えない

2. 可動域 (30)

		健側比	
掌背屈	106°以上	76%以上	15
	71~105°	51~75	10
	15~70°	11~50	5
	14°以下	10%以下	0
回内外	136°以上	76%以上	15
	91~135°	51~75	10
	46~90°	26~50	5
	45°以下	25%以下	0

3. 握力 (20)

	健側比
76%以上	20
51~75	15
26~50	10
25%以下	0

4. 日常動作 (10)

○	—	2点, △	—	1点, ×	—	0点 (P65のIV参照)
6点~10点						10
3 ~ 5						5
0 ~ 2						0

5. 職業復帰 (20)

現職, 現作業に復帰	20
制約あるが復帰	15
労務変更または転職	10
著明な制約あり, 部分復帰	5
就労不能	0

6. 成績判定

E	80~100, G	60~75,
F	40~55, P	35以下

後遺症の等級の決定項目に、関節可動域75%以下の場合、50%以下の場合などがあるので、境界を76%以上、75%以下、および、51%以上、50%以下とした。

また、用廃は、強直またはそれに近い状態ということで、10%以下の区分けを設けた。

回内・回外は手関節のみの運動ではないので、25%以下の区分けを設けた。

II. 橈骨遠位端骨折の治療成績評価基準

		症状・障害の程度	減点数
自覚的評価			
Excellent	疼痛, 労働力低下, 可動域制限	いずれもなし	0
Good	ときどき疼痛, 軽度可動域制限のみ		2
Fair	ときどきの疼痛, 注意すれば労働に影響なし, 中等度可動域制限, 手関節脱力感, 生活動作の軽度制限		4
Poor	疼痛, 労働力低下, 高度可動域制限, 生活動作の著しい制限		6
他覚評価			
I. 遺残変形			
○橈・尺骨遠位端長差	0±2mmの範囲外		1
○橈骨遠位端掌側傾斜	11±10°の範囲外		1
○橈骨遠位端尺側傾斜	23±10°の範囲外		1
II. 可動域制限			
手関節	背屈	<45°	1
	掌屈	<30°	1
	尺屈	<15°	1
	橈骨	<15°	1
前腕	回外	<50°	1
	回内	<50°	1
III. 握力低下			
○利き手	反対側の握力より少ないとき		1
	反対側の握力の2/3以下		2
○非利き手	反対側の握力の2/3以下		1
	反対側の握力の1/2以下		2
IV. 関節症変化			
	なし		0
	軽度 (関節面の不整, 関節辺縁尖鋭化)		1
	中等度 (関節裂隙の狭小化, 骨棘形成)		2
	高度 (著明な骨棘形成, 関節強直)		3
合併症			
	神経合併症		1~2
	手指拘縮		1~2
	腱断裂		1~2
総合成績			減点数
Excellent			0~3
Good			4~9
Fair			10~15
Poor			16~26

Saito, H., et al. Classification of fracture at the distal end of the radius with reference to treatment of comminuted fracture. Current Concepts in Hand Surgery, Boswick JA ed. Lea & Febiger, Philadelphia, 129-14, 1983.

III. A. Kienböck 病の成績判定基準 (1)

Satisfactory results

- 1) 現職復帰し手関節痛があってもわずか
- 2) 握力 健側の60%以上
- 3) 手関節掌背屈可動域が改善あるいは低下しても10° 以内

Unsatisfactory results

- 1), 2), 3) の一つでも満たさないものがある場合

Lichtman DM, et al. Kienböck disease -Update on silicon replacement arthroplasty. J Hand Surg, 7:343-347, 1982

B. Kienböck 病の成績判定基準 (2)

1. 手関節痛 (10)

なし	10
負荷時痛のみ	7
日常軽い痛み	4
常時の痛み	0

2. 握力対健側比 (5)

90%以上	5
80%	4
70%	3
60%	2
50%	1
49%以下	0

3. 手関節掌背屈増加可動域 (6)

20° 以上	6
10~19°	5
5~9°	3
5° 未満	0

4. X線所見

硬化像改善	1
骨嚢包像改善	1
分節化改善	1
Stahl index	改善 3
	不変 1
	悪化 0
Carpal height ratio	改善 3
	不変 1
	悪化 0

5. 成績判定 (0~30)

E : 24~30	G : 18~23
F : 12~17	P : 0~11

Nakamura R, et al. Radial wedge osteotomy for Kienböck disease. J Bone Joint Surg, 73A:1391-1396, 1991